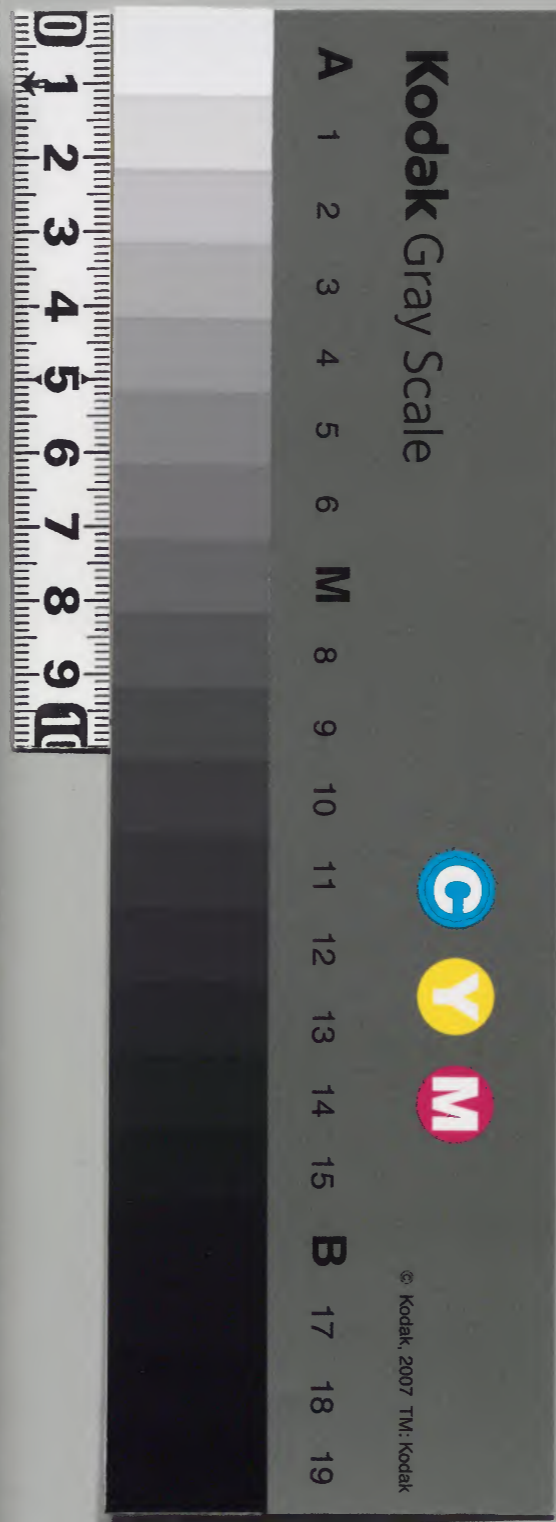




函	一	三	五	架
冊	六	六	六	架
號	七	七	七	架
類	四	四	四	架
和	五	五	五	架
書	九	九	九	架
內	二	二	二	架
閣	五	五	五	架
文	五	五	五	架
庫	二	二	二	架

內閣文庫	
番號	和 25574
冊數	36 (19)
函號	201 433



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり
白紙のページが続く箇所があり、白紙箇所は省略

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged, stained paper. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the page. The ink is dark and the paper shows signs of wear, including water stains and discoloration.

Handwritten text in a vertical column on the right page, possibly a date or a signature. The characters are in a traditional East Asian script, likely Chinese or Japanese.

拾遺

七月七日

七夕よあはれしつらきつらき衣いそ涙し神やとらぬん

拾遺

たのしみ

妹風よ夜はぬきかけの天は河をせよ浪は立ぬ死に

同

八月駒七之

逢坂の関は清米よ乳らんてかやいくらん平具駒

こたつ利

心

秋の野より花をぬる女郎花いしまらぬ宿い

妹の国はあはれなれむれし里をみくらぬ花をぬる

拾遺

志のせいこ

人忘れぬ花とさひあはれは山と水よ乳らんて

衣うは

拾遺

風寒み我より衣うは時北秋は下葉の色もらり

新奉

十二月のころ

霜の色もさうな柳葉のまやみれぬ花をぬる

むらたつ利

霜枯れ草葉をうらむとや大なる野へみれぬん

新古

いんしん

宮人あはれぬ衣はたふたふたはるるをたれは事

十二月佛岩

拾遺

年竹の古もれぬ花みはるる命も自常ももも

延喜十三年十月内侍屏風同(平賀)内(新奉)の行をせよ

野よ人あはれぬ所妹

はなをぬる花はるるをたれは事

拾遺

目

風の音妙しとあり久方け天津宮に我々もあつたれ
 春のよふ我があはれと女郎花んよ志也とていひたれ
 けぬらとてらば遠くが妹の紅葉をよもあはれ月を
 色をよもよとてつ我宿の萩の麻けうもよもあ
 しくつららうとてよつめ菊の花もよもあはれ
 吹風も散れとてふ紅葉よはれとて遠れとていふらん
 天喜十五年の春春寂院の御屏風は和舟内はむせよ
 くらつとて女も遠れとていふらんあはれおれね
 お花をよもあはれとていふらん水もあはれとて春
 春をよもあはれとていふらんとていふらん
 さしとていふらんとていふらん
 春の中あはれとていふらん春寂院の御屏風は和舟内はむせよ

拾遺

拾遺

拾遺

人々の中よとていふらん河津のよはれ花んよ
 くらつとて花もよとていふらん白浪のよとて我が立海も
 道行人の御屏風は和舟内はむせよ
 けぬらとてらば遠くが妹の紅葉をよもあはれ月を
 色をよもよとてつ我宿の萩の麻けうもよもあ
 しくつららうとてよつめ菊の花もよもあはれ
 吹風も散れとてふ紅葉よはれとて遠れとていふらん
 お花をよもあはれとていふらん水もあはれとて春
 春をよもあはれとていふらんとていふらん
 さしとていふらんとていふらん
 春の中あはれとていふらん春寂院の御屏風は和舟内はむせよ

新巻

新巻

新巻

地のかしらよ藤の花は松よとて
 緑の松よとては藤の花よとて
 天喜十五年十二月保忠左大弁之左大弁北方被奉
 且十賀時屏風和舟

我宿れ松乃指は佳しる千代の雪のこころあつてあり
みくしのこころもわかれぬる涙のわかれぬる

妹

とていともせのうらみはしやむねいよ秋もさくれば
くはらあまのこころのこころの雨のこころの
紅葉もれは散るるあはれた妹のこころは残るる

寛喜十一年九月廿二日右大将御六十賀清和社七宮

息新はつる由り給いける時屏風初寄四首春

拾遺

百千鳥はさびしくも梅は春のこころは
菊は花をさけぬる行米のこころは
みづ野のこころは雪は白くも

寛喜十六年春院御屏風これの奇内裏にわかれ

るを給りし之首人家よ女もは度よ梅は花を
人よ心よ残るる雪をさるる

梅は花をさるるもさるる野のこころは
人の末はがよたつてさるる梅は花をさるる

心は新よんはさるる梅は花をさるる
地のこころはさるる藤のこころは

花のこころはさるる

藤の花の色もさるる梅は花をさるる

さるる梅は花をさるる

拾遺

梅は花をさるる梅は花をさるる
梅は花をさるる梅は花をさるる

紅葉たれ散る時行のふたはよるの山はけり
白浪の向の郷たれ也紅葉たれ錦をたけり
お毎よ向りのさうさ雪たれ水よ色も残る
何の雪を空よりて北へ午向の春たれ
安喜十七年中古を宮の御屏風元日
夜あつたは年たれいんかうくぬり

子目

春霞たれいし松の年あつたは春のよる
道行人とらぬまよる

おらこ道たれまよるまよるまよる
あつたはねもたれまよるまよる
滝あつたは

松のまよるまよるまよるまよる

池のまよるまよるまよる

池水よ咲たれ藤を風向の浪のまよる

九月たれ

紅葉たれまよるまよるまよる

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

貫之集第三

延喜十八年二月廿五日みこけけのみめきの屏風の寄

内のめし志よたけはう。

正月 八首

いのちをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

二月

ゆるんもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

三月

ゆるんもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

七月

萩のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

八月

天雲のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

九月

いづれをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

十月

いづれをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

十二月

木のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

延喜十八年四月東宮の御屏風とてさるるもさるるもさるるも

んくはさるるもさるるもさるるも

いづれをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

池のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

水まをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

よまへたる所

けまほしうてぬまの波のせまはる所

七月のひかりたる所

天のそよ風のそよ君のそよも人そよもそよ

男の秋のそよたる所

ほろよよまよひたる所 妹の秋のそよたる所

こたのかりたる所

むらもを久しむ地とそよも我のそよもそよ

わらわのそよたる所

花のそよもよのそよもそよもそよもそよも

雪のそよたる所

春のそよもそよもそよもそよもそよもそよも

矢喜八年兼香殿の屏風にそよもそよも

拾遺

十四首梅のそよもそよも

梅のそよもそよもそよもそよもそよも

鳥のそよもそよも

そよもそよもそよもそよもそよもそよも

松よそよも

そよもそよもそよもそよもそよもそよも

人の春の野のそよも

春のそよもそよもそよもそよもそよも

散りたる

ほろもそよもそよもそよもそよもそよも

河のそよも

藤の花さしつらん其の世もなき松と杉の風
車よのりく人つとほる

一人もたつらうとまじくつちを命神のみあれよあはれ
口口昔

あや草根さうらひのしほきと花さうらねる
六月

ねらぬく河せしよさうらねても千年のなごらう
空よ鳴鶴とたが

千とせぬくつとみくとも一若田に鳴海とちり色
尾をさうら

はらうとも人つらうらと薄らうと妹ともか
九月菊とさうら

妹毎よ霞のまもも菊はも人れまさい
道なく人のさうら

道と時雨よあいにうらうら
しんはつら

^{新勅撰} ^{本ノミ} ^{あいに} ^春
あはれもせられ衣らうらねらうと我神は
雪らうら

春と草木よむらさくは隆くは雪はねら
天喜二年丑月中宮の御屏風は和歌正之首め

^{拾遺} 利一元旦もせむ所
昨日らたまらうとさうら百年は其のうら

子日
もらぬ松とさうらうらねらうと命と其の色と

二月梅乃むらん所

い里よむしこいあゝ梅のむらんつて宮乃かゝりて

たふ所

拾遺

しつゝは時しとれ其の野をふりて今も

三月い寺ままつ

めい乃らいをねかひんをねらふらん

三月いもら目むつ

散花のともまつていしつてまねて

四月い

いれをまゝ。いれをいんこのいん

馬よめらたる人ねか

行るゝをかくれまはゆえこのむじんのむじ

人の家止垣根の外に

いふもまらぬもいれ。白妙の外に

昔縁人のいからい子規を

い里またいいませ。時鳥さしはれ

雨命。い田い所

時よいもいれいり。雨。い田子

六月い

夏衣らむいれい。林い

河

大空よあゝい河上よい。い

七月七日い

人よれい空をねらみ。天い河をみ

田舎の家めり葉

らふりて思ふるるよら林風より由らりぬやもはん
八月のめり人の家もむをわらわらふ所
みおんもさひやもこれせといかろふらふもよき
さきうやいといとん林風の匂ふ時と妻をさうらん
九月雪ふいとよたら

^{拾遺} 兼たむの紅葉を林風よりもさうともみさうさのつら

河内もさうよ舟めり所

いさも人もさうよ河内もさうよみさうよい海もはん
十月がくはむ

らさうもさうよもさうよ菊の花は林風もさうよ
十月めりらにみたる所

^新

らさうめり衣もさうよさうたう若火のさうたう
十月人林風も梅もさうよ

命もさうよさうよ六打もさうよ梅もさうよ
長喜二年はらわらわら北のうす屏風は舟十首

えいねのさうよいめらたはらゆらもは人林風
たこの浦

命もさうよあらうとい浦浪らさうよ若のうす
あふさうよ

若らちとせのさうよあさう清水も我もさうよ
いさう

あさうらうもさうよ行水もさうよ舟は舟は代もさうよ
あさうよ

新亭

君代乃くくはらさる白妙ははのよきいと堆のい
むらぬ

ともに行ふ舟をる毎よかおし君をらしむ終

松をい

はらひぬ時^年にぬきぬぬももさむらふをたらしむ終

林さの野

手とぬ人いねらりる君たぬねくまとも林野の秋

ららぬあは

ぬらひは音かぬねんく百年乃林のよはらぬいせら

えらや一ん

まきのたのむいぬららね霜よせすらぬぬぬ

むぬぬぬ

梅乃むねかちる黒の雪の冬霧りくまをさるく春

ういのい

か一のう野乃い百年の雪れははもあかちりり

女長四年ははらぬ民部卿六十賀はぬぬをく納

て内かせらぬ

らく野乃若葉も君をいのくもたの為はは春ぬ

春橋に松とれもよるは所

とくむらぬぬ松もさるぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

人の家まらぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

我やくまきぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

柳乃む女ともらぬぬ

君乃我むらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

人舟のりて藤乃せむたる所

竹田のりて藤乃花春のゆりて色はらき

女ももり鏡のり所

いそそくわたりて滝のりて松乃ともめはらき

松乃ともめはらき所

松乃根よはらき泉乃水ちりてはらき

妹乃ともめはらき所

いそそくわたりてやりのせむるはらき

馬車乃りてはらき所

いそそくわたりて人の行野のりてはらき

麻乃萩のせむ中よはらき所

いそそくわたりて妹萩をともめはらき

菊乃せむる所

かみせむるはらき

鶴乃池のりてはらき

いそそくわたりて前よはらき

女ももりの紅葉いり所

らよそくわたりてはらき

人の家よ紅葉乃河乃りてはらき

紅葉乃りてこのた水をりて時をともめはらき

いそそくわたりてはらき

いそそくわたりてはらき

女長四年九月法皇乃御之十賀京極乃御所乃はらき

いそそくわたりて終時乃御屏風の奇十一首着葉

誓
去むじしむらうしよ君為千年はしむらう
わねわの野しよ野を君為美代志りはん

海のい

しよしよしよきも春霞たねいし野の松を君

松よしの藤

拾遺

松風はゆんざりたすくは松くもめしは浪

鐘乃水

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

いよか

松風はゆんざりたすくは松くもめしは浪

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

いよか

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

菊

いよか

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

作

新古今

年毎の生れふ竹のよさをくはしむらう

三糸有れ屏風は舟

いよか

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

いよか

ふふたなよあさふふふふふふふふふふ

誓

いよか

十

雲乃むの... 浦毎よ... 梅乃... 新...
... 白雲... 海... 袖... 宿... 舟... 浪... 鏡... 紅...

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 雲, 浦, 梅, 宿, 舟, 浪, 鏡, 紅.

もろみ我長いしむの海の玉乃とをちりん
よるよる

はしとつれもんめせりい空もきり花をばら
八月十夜うたのかしらよ人の家よ男女はくわ月
乃入をんる

ちまろきみちくはるのたまも。月とみちり
い田の中よたつらしたる所

妹の田よの中をきくしりくらよもふらみちり
河のなかりまはるるむしたる所

むれらる川のたつも君。為我ふ事をとくつら
よんらんふ所

とらつらもももわ我々の秋さうよもさし
女乃菊れもんは所

をく霜乃露やをせり。菊のむはれをともれ也
紅葉はくもつらたつるをきくたつ所

いねもはいこもやれあめりのは紅葉をんる
河は紅葉わくをんるは所

紅葉をんる時たはる河みちり。此妹は
ふら家の竹たかくわいたる

竹をくはらうたつ。宿るん千年を外の
ねたつらりしたる所

ねたつらりしはれはあめり下草も
霜枯よ成り野へもははるいさくふらも

ふらよ神はつ

神もつ時よさしむらひのよき陰のさくら

心里に佳人の雪のゆるりたるをん侍

新勅撰
新古今

兵長六年中宮の御屏風の音四首右紅權中侍より

めれいはいよいつれにわらわをゆつと此河浪打海り

時鳥さくらさきさきさきさきさきさきさきさきさき

滝せらもわらわの皇のうたい毎に人の時鳥さき

さくらさきさきさきさきさきさきさきさきさき

京極の權中納言の屏風にけりうの音四首

去雲の三の時鳥さくらさきさきさきさきさき

我やよき梅さくらさきさきさきさきさきさき

野へさくらさきさきさきさきさきさきさきさき

而して風ゆる松の枝にわらわのよきさきさき

心もゆるりあれい年毎にわたの心もゆるり

わらわのよきさきさきさきさきさきさきさき

わらわのよきさきさきさきさきさきさきさき

行月目ねさきさきさきさきさきさきさきさき

其

さくらさきさきさきさきさきさきさきさき

妹

一年をさくらさきさきさきさきさきさきさき

なまさくらさきさきさきさきさきさきさき

わらわのよきさきさきさきさきさきさきさき

さくらさきさきさきさきさきさきさきさき

さくらさきさきさきさきさきさきさきさき

春

去きて風吹りくふるに流れをまじり玉に散
りわらわし去りたりは年ぬれはしむ身は他
へささるぬふ身され大去来たるいし松を
去毎よたはるお青柳乃凡よつとて来は
るし今も心とるに桜花をせしうらむとせ散
人しお我もまらし一し桜をいしはらるれ
今より一し残る岸乃藤をいしはらるれ
あつとくはる河浪立のうらむらしはらるれ

林

新原

大空を我もつらめいにかしは事待夜を独り
女郎は匂いしを神よりはらていあを我も人
行水乃心はたれもたれはるはるはるはるはる
一より菊はるはるはるはるはるはるはるはる
あつとくはるのいしはらるはるはるはるはる
らるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
大空一よりはるはるはるはるはるはるはるはる
去来みせしはるはるはるはるはるはるはるはる
雲の鳴也めはるはるはるはるはるはるはるはる
了る月をさるはるはるはるはるはるはるはるはる
十日程の男あはるはるはるはるはるはるはるはる
大空のいしはるはるはるはるはるはるはるはるはる
二はるはる

都よりとるはるはるはるはるはるはるはるはる

馬車よけり人ねかく野よけりわりの向く
乃花咲まのちたのり

何れも其は待ともし里待ともし我は咲れ
何れも其は待ともし里待ともし我は咲れ
雪のちるつたき春風よこけぬとぬれぬ
河邊ちんもさうにれ水底にまきともし成のり也
らうらうらもせん時久もぬ我衣手に雪の降
其乃為めり心はぬれられ松もさうともしは藤

梅花のちる

意

月氣よ道もさうし我宿よ久しとんぬ人ともん
こぬを月よぬともま至乃夜毎我は氣をたは
る何れん夜也ねともね久方乃月またよぬ人ね
心もさうにれ宿に其れと雲井にぬれ成ぬる
か

そく霜乃ちやもき菊はむらけりもせれも
鏡にせしうは事あり也我袖乃ぬれぬは白玉
よとも鳥乃ぬれぬ宿にぬれぬ人
空のれもぬれぬ月氣乃ぬれぬこも大も
らけれぬ紅葉乃ぬれぬ河邊にぬれぬ
雪のれぬ草もぬれぬ梅もぬれぬ朝の露の
いへんもぬれぬ雪が花のぬれぬ
んぬれぬ梅もぬれぬ朝の露のぬれぬ
紅乃ぬれぬ雪のぬれぬ野のぬれぬ
白雲乃たぬれぬはぬれぬ我もぬれぬ

馬よみ行のすたひいりたる所

家治よみ行のすたひいりたる所

月夜よみ行の家よ男のすたひいりたる所

いりたる所

すたひ

ふか乃月れたらりたる所

あつらひ紅葉乃散らりたる所

ゆきも紅葉もいりたる所

美平六年去た大た殿乃御むかひたる所

絵いり隔りたる所

ねり也乃松と竹と行たる所

いりたる所

いりたる所

いりたる所

いりたる所

長安乃行りたる所

いりたる所

いりたる所

いりたる所

いりたる所

いりたる所

我乃いりたる所

いりたる所

いりたる所

拾遺

草木もよみ花咲くはらけの雪を其よりとては花は感ん
松枝よけりくくは枝を白雪にたれり年乃志也

貫之集第四

天慶三年四月右大臣殿御屏風乃舟首人乃家

よ紅梅あり

後撰所恒

紅の色をくく梅乃色をくくくくくくくくくくくくくくくく

青柳をくく

青柳乃梅枝よこもれよ糸をくくくくくくくくくくくく

古舞よくく

後撰藤原権三郎

くく色くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山里乃梅をくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

梅乃色くくくくくくくくくくくく

吹風よ吹くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

道徳大人

あつたる道徳よあつたるまきまのまのりの方ねる。お

藤乃也

時鳥さしつれ時が夜れもさきまをるれらる。お

新亭 昔のころおちるあつたる。お

人の家よこおちる

まゝ時さしつれさるれおちる。お

男の里よねくおちる

行とつたよめおちる。お

男女舟よおちる

待たるもおちる。お

妹乃風萩乃葉をぬく

家の女目をみる

さきまあつたる。お

道徳大人乃物

さきまあつたる。お

こたつ

夏草乃むらさきと女部女はまき。お

男たいてい

鳴鹿乃おちる。お

女めの家乃菊

さきまあつたる。お

九月

百を乃千を秋とよめり乃心おのそしけり月秋

新草 九月菊

のりけ長月乃菊の花は流れ乃録のうへりそん

十月あゝろ

い川をいりてらん流るる紅葉乃ためあゝゆ

十月あゝろ乃ゆり

是乃乃いる乃色程ふももたまたま乃ゆり乃ゆり

新古

新古 昔の事乃千年をまうあゝい乃いる乃色いそり

十二月佛若乃あゝたもろろ空よ

若らふ心よろりて冬毎の雪乃ふり乃ゆり乃ゆり

同一印時乃内れ乃せしとろり元日

傷乃を乃らるるもろり乃

散らふ乃を乃らるる乃とろり乃雪乃飛見乃櫻地

三月乃らるる日

いん乃とろり乃去と知乃らるる乃ゆり乃ゆり

四月地乃かゝる乃藤乃ゆ

水底乃氣乃い乃藤乃花乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

其乃らるる

新草

河乃乃乃志乃の乃わら乃とろり乃衣乃乃乃乃乃乃

一年よ一夜とろりし七夕乃ゆり乃乃乃乃乃乃

萩

妻乃乃乃鹿乃海乃秋乃藤乃下葉乃乃乃乃乃乃

菊

千年を〜〜〜
咲残る菊よ水もさるれば
八月鹿乃鳴を〜

水よ紅葉うの海
紅葉なる陰を〜
人れ家よ松竹あり

宿よある〜
〜
〜

同一年といさう中
海に男れ女も〜

あ〜年れたりよ
山室よ〜

あ〜松を〜
野よ〜

いよ〜
旅よ〜
わ〜
かた〜

心〜

る身より別をわしきれせがうんこふさうが
男女の家よりうらへしめいたる

草も木もあらうふれと吹風も君うら月いづれか
ぬ一々

懐もあいらおこし一月我身よれをけりし
古郷もせまき海

養
めりもれもさうらうに死し命も里のいづれか
んしとめりもさうらうに命も里のいづれか

三月廿二日
行去れたせら時成つる雲の音とくれぬ命から
去らふらうとさうらうに雲の影もあつらうらう

神まはる

外もせれをらほむなふしうに死し神をのり
去らう外月も去れぬにうらうに死しをらうら

養
し里よかすらうらうらう
け里よのり人の家よりうらうに死しをらうら
七夕

夕夜よいさうらうを天川よくたさうらうに死し
けりあふ年に行かぬと天川君うらうに死しをらうら

もらうらうに死しをらうらうに死しをらうら
月よしうらうらうに死しをらうら

引とれぬらうらうに死しをらうらうに死しをらうら
月氣と雪うらうに死しをらうらうに死しをらうら

去めいささうとい梅もろくしる人ねん
人乃家もほろくしあまらう柳梅もろくし
しるあまらうしるあまらう梅も
青柳もあまらうし梅も敵もろくし
藤も松もろくし

しういまたのあまらうあまらう松もろくし
男神もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
男神もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし
規もあまらうしあまらうし

拾遺

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

あまらう松もろくしあまらうし
あまらう松もろくしあまらうし

道行く人河乃かきりよらるるむねなるはな

よらるるむねなるはな 昔たはしを浪の雪の

四一年三月内は御屏風乃れは舟九八首元日雪

ふもれ雪乃かきりよらるるむねなるはな

子日

何さらくく成ともまけ野乃ん枝の根社人地家

梅乃花のちん

梅乃花白ひくくちん時ひくくちん少は雪也降り

柳ねちん

青柳をたらしんちんまけちんみんはな

梅乃花

さくめはちん時ひくくちん少は雪也降り

田乃れ所

あは田乃れまけちんみんはな

山

うはまけちんみんはな

まらく

あはまけちんみんはな

池乃か

こはまけちんみんはな

子規

明く月日あはちん時鳥さく色

ふ

あはちんみんはな

五月音

鳥の音いづるあけとも時鳥さくさるきつ月せり
池の音いづる。

我も池よのほほにさけは千年乃み枝教をん
人乃木れをよきめ。

陰の音いづるた風吹れいあけさくわく
復のくく

行水乃くよいよ。河のく河浪たのあけふわが
七夕

たさるるらふわくわくを命の年。たはいあせり
よは鷹をたさる。

妙鳥乃色よ高きうや久方の空た^秋も人乃きく
鹿の音いづる。

鳴鹿乃色をよわく林萩乃きくわのい我は
八月十五夜

月よにあふさくはともよまへに今夜まはは
九月九日

みも人乃若をよむいよ菊首年をた^カ花まら
野乃花らんは

とく露やむら色く。露のく林は昔も人み
九月くく月

草も木も紅葉らつめらん。くく林は昔も人み
残れる菊

秋もきく花よいあれや神そ月時ふ花乃色は
秋もきく花よいあれや神そ月時ふ花乃色は

吹風もくもあふ萩乃葉也よ中を林は
いそぎ介の海にけり我やよけよ由らぬ今も
人志れしきけり所の時一とあけ月あつとけり
蘆花前 乃人けり女郎をけり袂に露をり
けりあつとけり女郎をけり袂に露をり
神も月時ありあつとけり紅葉を錦にけり
ふりの野乃川にありあつとけり鏡乃けり
同一年九月内裏御屏風は首元目雲の
白妙の雲乃けり草とよと年とよと新
梅乃けりよと男女しれり酒の
よとけりよとけり人乃けり
よとけり梅乃けり常とよと人乃けり

五十一

宿らく種たる梅乃けり香よとあつとけり

九月九日

百年を人よとけりよとあつとけり
いねりよと

朝露乃けりよとあつとけり
同一年四月はよとけり屏風乃奇十二首

千年のふれをいけりよとあつとけり
あつとけりよとあつとけりよとあつとけり
ねりよとあつとけりよとあつとけり
夏衣乃けりよとあつとけりよとあつとけり
年毎よとあつとけりよとあつとけり

柳葉乃たむらよめれにわきまに余たすく神はる
が

冬草乃枯もりくさくさしよまうさる
るよけり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

廿員之集第五

恋

^暮こゝろようしつらさくも人恋りはれは

^暮い後家乃もりたれも人恋りもま

^暮世中いっくもめれ吹風乃め人恋りも

^暮吉野河若浪たろく行水乃るも人恋り

^暮あふ事い雲升りももれも音もろく

^暮人志風揚るも時難波乃も昔れも

^暮浪乃もめれつれも吹風乃たろく

^暮い乃もあつちも昔乃めももれも

^暮人志れぬもいれももれも我歎も

^暮ももあつちももれももれも河はる

^暮ももあつちももれももれも河はる

以寄新寄哥人荷

春

白雲乃くもりたるいく奉たはまはみすもる世新

後

紅乃ゆりつはらちる海よはたもはる世はるあれ

新

凡吹の峯よつらる白雲乃くもり常る人乃心の

拾遺

事いやはせよあゝらん海河さるる音れは地なるる

拾遺

凡吹の乃くもり浪はつはる我衣平世のさく時

拾遺

海河つらるなみあはれ守はるる存つる神はるる

春

行末はなもまらつらるあふ事乃年月もはる他は

白玉もろく一洞と年心れらる紅よらるるあはる

さきかゝるるはる人さるる我の心はるはる行え

いそよはるる白乃くもるるあはるあはるあはる

後

七折れしときもたさるるあはるあはるあはるあはる

年向せぬ別はるる身はるるあはるあはるあはるあはる

長に夜よはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

拾遺

下はよはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

春

可ふはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

さきかゝるるはるあはるあはるあはるあはるあはる

逢事乃くもりあはるあはるあはるあはるあはるあはる

さきかゝるるはるあはるあはるあはるあはるあはる

春

はるもろくあはるあはるあはるあはるあはるあはる

春

上はよはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

春

我意はるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

春

君さるる海さるるあはるあはるあはるあはるあはる

逢事乃くもりあはるあはるあはるあはるあはるあはる

拾遺

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

春
妹風のいよよと花よよ咲るよよと
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

春
年とゆりて月日るよよと
我為れめいよよと

貫之集卷第六

延喜十二年定方左衛門督の賀状時乃奇

水底よ乳をうけりて陸にせらばまらとくは有る
百年といふを我がはわらふとふはあはれ
八条院よりあんにいふとやうなる

長夜に林の志くをいへんをよきとよきと
延喜十二年十二月廿五日
乃賀状さしりるに賀状をねし時乃奇

わいの新くはあはれ衣千世をまうた
岩れらよらうとまらんとせはる袖の
とまらんとまらつていふよきとあはれ
年れららよまたあはれまらんとまらんと

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

住ははの松ありはよも浪れはくはてりあつた

災喜十年春官乃女也取乃女のわぢいあぢ

賀平ら給ふやう御をいりれうせきあ乃右大弁

乃本を給ふ冬儀大弁 傳志

心あうて極たる宿乃をさるん千年うはらぬせよ

年毎もむいふはくはる若う千せうわらん所家

藤原乃ぬちきり中將といさうよさうよりいよ

いかりあまうあつたはる紅梅をばらういし

らんあつたはるいあつたはるい

去毎よはなほはなほさるいさういさういさう

女長丑年九月有衣殿せといりあつたはるいさう

人橋乃らまわらうさういさういさういさう

草も木もといあつたはるいさういさういさう

あつたはるいさういさういさういさういさう

松

祢ふいさあつたはるいさういさういさう

色之内松れ葉乃れ秋えん紅葉はるいさう

いさういさういさういさういさういさう

打もいさういさういさういさういさういさう

浪もいさういさういさういさういさういさう

千鳥

たつたはるいさういさういさういさういさう

行いり千鳥鳴らる演は舞

善子

延長八年去旅北國よりつらう兼平九年よ京よ
のらうて去夫た殿白河殿よわらうもまて御しよ
はううたわよよ奇たふもはれとめれはあう

百草の七乃ききうくうけつて音もつらう白河殿

はねはまきの中納を乃めめいめまき此奇扇を

よはよのねあう

みう野の松乃ききと地めめいめく流のりあう

宰相中将乃田奈乃宮よまみううめたよあう

ううはらうていふうあう

地よよも水底よりはれんとも十年た松地よあう

兼平五年十二月左衛門乃あうれはれ男女老た

ら元服も御給命よあう

後世

大つとをさか乃いれ小松京を乃たうなれ千世に傳ん

源忠朝た乃よもはせを給命あう

君をたにいそくも百年をまうみんあう

天慶六年正月藤大納を殿乃御せうたうあう

袋をたけらんせんうて給命あう

くよ目紅て成より大殿よけりあう

て我昔らうらうらうて作らあめあう

てははまよのけいけいけ給命あう

こはうらうらうらう目松乃枝よあう

よらうのりあうらうんれあのあう

ふよたてんあうあうあうあう

あうあうあう

吹風よ来たまはる池乃集ふ千世より松林陰より

貫之集第七

別

^奉人れしむるわしきよあ

^奉けしむるいしむるを白雪乃交しらんわらふ

^奉みらるよまふ人よあ

^奉白雪乃あはれ重よあはれわらふと思ひん人よあ

人よわらふよあ

^同別々事いせよあわらふよあ

^奉音羽乃いせからる人よあ

^奉音羽乃いせからる時鳥君乃いせ

肥後乃いせ藤原乃いせ

い自由乃いせ

い自由乃いせ

亭

藤原乃礼をうむさし威くは高塚坂園格を
居てつれも行ふあはれ人へのあつらふ。これ終
意茂朝をたつていよ急浦朝を儀する。雨降目
久方雨もくよあつらん命。うへ人乃あつらふ
みらるくよくする人をたつた。
ら夜もつらつた。命乃いよ人々をくみり
とて行く人よ。これたつた。

倉

ちも死のつれいよつれ行ぬ限若よ。つ
とをたつて人たつた。我袖乃洞れもたつた。
あはれまの無業作も河のく。うへ左衛門乃中
みらるたあはれまのつれ。つれつれつれつれ。
若れつれ洞れも。つれつれつれつれつれつれ。

あはれつた。人たつた。あはれつた。
行ふもつれん時。つれつれつれつれつれ。
紅葉もつれつれつれ。つれつれつれつれつれ。
つれつれつれつれつれつれつれつれ。

千年をたつた。つれつれつれつれつれつれ。

紀伊三男紀能元

友中舟つれつれつれつれつれつれつれつれ。
所あつた。つれつれつれつれつれつれつれ。

いよつれつれつれ。紅葉の君。つれつれつれつれつれ。
あはれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ。
つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ。
つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ。

我も草乃つれつれつれつれつれつれつれつれ。
つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ。

君はく所く安月つらつたはるもくいれ意くは
同一の將もは(移)く人よいもつらつたはるも
いれもつらつたはるも

後撰

けりく打てくも火煙めくはつたはるも
もつらつたはるも

もつらつたはるも
もつらつたはるも

もつらつたはるも
もつらつたはるも

もつらつたはるも
もつらつたはるも

もつらつたはるも
もつらつたはるも

いれ

打るん西氣くもつらつたはるも

拾遺

もつらつたはるも

もつらつたはるも

もつらつたはるも

もつらつたはるも

もつらつたはるも

いれ

新草

もつらつたはるも

もつらつたはるも

かたはるの舟よこしつらき世をた朝たつては
わかれもあはれなるよるよま。

千年より余のたつたはるる若たつては

わが人の心よはれむきよる業習ひを

とまはる若きくふとふと縁はる

わが人の心よはれむきよる橋はる

誓
わが心よはれむきよる

まがこは道はる風むきよる

わが人の心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

わが心よはれむきよる

拾遺別 行遊と志願とめくくく人時乃若と終

源は人々朝行乃めくく守りたるよある

祿よる侍候とめくくされはねんよある

とらばは頭中將東とらば女よくはさくくみ

さくくくくくくくくくくくく

別とてよら及むくくくくくくくくく

志願の行人よある

拾遺 月朝の女とらんくくくくくくくくく

人々國一くはばちいよある

奉 又拾遺 志願の志願とめくくくくくくくくく

貫之集第八

哀傷

奉 又拾遺 あい志願の介とせたるよある

後とて志願とめくくくくくくくくく

奉 又拾遺 志願の志願とめくくくくくくくくく

い寺一行みちりよある

奉 柳露乃とくくく田らめくくく世中とくく

あくくくくくく家と核れをくくく

奉 也七香とくくくくくくくくくくくく

河原乃大たぐせ給い候よいあつ志願とめく

所乃いほれめくくくくくくく

奉

若くは... 浦... せり

... せり

... せり

... せり

若くは... せり

... せり

浦... せり

... せり

昨日... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

若くは... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

... せり

女貞之集第九

屏風乃繪ねむむをよめる

^暮 爰此めし時ら及らうちて今世にまをれん色は常らん

よは乃雲ねばゆらう月影くこをみよ一糸

いよ人れまを給ふよ

天雲乃たふいさういさうくぬ夜ねく月影ね長閑

^暮 ときふしうらみはねう月めく夜ねははは

いほく國よあめい藤原乃ゆ會はれ朝た

乃まよこちこさうをよめる

^暮 若とくいはれは乃志まよ鳴きは乃ねんはく今

とあふく

^暮 入給意

神は浪たりしははは浪ねるまを此若を待海乃

雞破しうよめる

^暮 まよらうはめまをよめる此乃あまは我成り

地よんねる月をよめる

^暮 何しは乃あまを水底よいねるまを月影

身をよめる

新勅撰

去りし林わくらんねははねまは朽木れまを

うらぬ給まらや加賀乃志まよ感て人の志まよ

ゆらんしあめいしよ肉乃ねませうきよを給

ぬねくよまを

何常や花をよめてたはめらんねと我身はらう

こらうらねる人よあは

奉^入書

しつははこし白いさくねると夜も夜よとね
雨ぬれ北よゆきいそ天雲を若よぬく今とあ
まらひいこころいふ井よ女乃年あけひく水をむ
しつてむむさるるよみや

奉

しつふ年北東よふくしん乃井乃あうて若も別
しつて院乃ふくしつ時やう乃宮よ賢義乃祭
うよ祭給んともいふはあよ

松をわしつちる毒むしよ岩清水枯く末とを
いふ水松陰ゆく新あうてむむくともあ
く人源乃さるるむくともいふ

千世と心若たりしつははらうはんといひわ
むむくしつていふはらうはんといひわ

我がけり家とむむを散むい候もともいふ

源乃いんむむいんよいよいん

時よむくはらうはんといふはらうはんといひわ
九月九日むむはらうはんといひわ

はらうはんといひわはらうはんといひわ

いふはらうはんといひわ

はらうはんといひわはらうはんといひわ

奉

皇後も時雨といふくもいふく下葉はらうはん
昔よせよはらうはんといひわはらうはん
はらうはんといひわはらうはんといひわ

奉
いかにあつちの梅を折つて
今にいとくもめ郷にむすむすのふり

年

花ももほるよまはる梅を折る人おのゝん

妹乃もは日敷上乃乃一も河せうのうよ

はる舟もははるよのう

奉
河風乃葉くもあつちの梅を折る人おのゝん

むしんお家よ酒はめいひの梅はるの葉を

んくもははるよの舟も一はあつち

ちうんよもははるよの梅もくくはるの葉は

春舟合せせ給ふよ舟いんもあつちの舟

れ

拾遺

偶散木乃の風はむしんく空まはるれは常は梅

是喜舟時やよの舟はる人あつちの昔今此の

舟もは給ふ夜はあつちの舟もはあつち

舟の駿乃とし梅乃木よ子規乃よあつちの舟

了胃言乃あつちの舟はあつちの舟

いりち一舟も舟給ふよ

こしついつくもあつちの舟もあつちの舟

はる舟もあつちの舟

いんよははるの舟もあつちの舟

はる舟もあつちの舟

君も我宿もあつちの舟もあつちの舟

一

しほりいけなるやめいけなる誰為よらけり
とある一

しらやう君といきんかけりて外より
在東元方とてよきしは

皇雲のまじりたるはくろくは松と君
ゆみぬるよ

いぬの松よめ君松よ我の秋はとらめ
源のむね松の朝たると

君いりともあつるも我の心は
とらるる

草の露をわたりてあはれ
みけぬ

はとるもあはれとてはけり
一

わくも余ちり母の母の人れは
紀のまよるるうらなれり道より
わくも余ちり母の母の人れは

礼いよいよとて神の志給ふる
あはれもよるる神の志給ふる

うはよいよとて神の志給ふる
礼いよいよとて神の志給ふる

わくも余ちり母の母の人れは
あはれもよるる神の志給ふる

あはれもよるる神の志給ふる
あはれもよるる神の志給ふる

うらひのらめめしきぬ大空よあらとぞうをさかす

奉入拾遺

ちよまるもみけり鴻より有よめり

源のくいのふれ朝たのむいねをせぬよよ

こしころはききくはれ

去日ら我ら人らううたよはまのあき

とあふ

こころふんを懐せらる。はふまのけり

てはたあふみねのともういあ

君よあまのい言よ成ぬん今朝にちれん

拾遺

めいむらういも君よふねはすもらと我地ま

後撰入拾遺

朝たあまらるもあきとせはれめあ

拾遺

霜くしんう梅のきはまら長よ我身めん

拾遺

ふんれ我くんや年きく鏡乃新しぬる

ふんれいんよ言せぬりまるとる老れとる

後撰

ふんれいんよ言せぬりまるとる老れとる

後撰

まのこ

ふんれいんよ言せぬりまるとる老れとる

せんとく常はあらめらみらもあはるよまめあはる
わが中梅乃許もよいあつらん松たてとわ

新奉

アまろ酒さしむはあつよ
おまよやくまのくまれうらなわぬ雪の松たて

めし前乃去と株とはらんまはるしよまあかひ

まろのまろつてまらける

拾遺

去株よといみえれてりたぬ古時よはまろつては

みらぬまてし

草と木とまきいれり株風まはるは海島

一

しんがらあいらいあごびは花枝をけらうま

もまらうていんるまはらうま

まをいしとせしとやたのありま株しちりは

殿乃男女いんたれま命りしと給ふ夜殿

いまうしむしるみめまてはまよはるま

うへ給ふ所

いりまきあふいれあるま君をくまらるま

三月はいり自家うらら

我やまをまらまらうららるんもまきしは

いねおれた京大夫れまらくくまらまを

まらまらまらまらぬあいんあ時いり

とあるか

後ちら卯もまらまらあめららるまらまら

いんまらうて歎あつよ正月はは友集らるま

大敵とていふ事終つていふ事ありては終つて
朝日とていふ事終つていふ事ありては終つて
おれとていふ事終つていふ事ありては終つて

年一
理よめたるは枝のてめはしき事なれ
めとていふ事終つていふ事ありては終つて
のふとていふ事終つていふ事ありては終つて

年中たれりたたりていふ事終つていふ事ありては終つて
年一
いかに君もいふ事終つていふ事ありては終つて
入念一

いよとていふ事終つていふ事ありては終つて
世中たれりたたりていふ事終つていふ事ありては終つて
いよとていふ事終つていふ事ありては終つて

君とていふ事終つていふ事ありては終つて
いよとていふ事終つていふ事ありては終つて
君とていふ事終つていふ事ありては終つて

四月とていふ事終つていふ事ありては終つて
途とていふ事終つていふ事ありては終つて
四月とていふ事終つていふ事ありては終つて

年一
らとていふ事終つていふ事ありては終つて
源とていふ事終つていふ事ありては終つて

拾遺

家よりつらつら時にお井乃より一りもわい
六月よまた紅葉たつるころつらつら奇りなうは
乃朝たれさしりさるる

秋よみれ復た野ちりよはよの霞たれあてり
とあふ

復るよ秋よまのころ紅葉の巻もわい
おどりよ武部野乃七也伊勢たつらよ
もろもも秋のころよわらつてあまのた

後撰 大拾遺
人よ秋のころよまのころ秋のころよまのころ
とあふ

後撰
千代よ秋のころよまのころ秋のころよまのころ
とあふ

用一所よ秋のころよまのころ秋のころよまのころ
寫よまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

也

青柳乃いとまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

ら隣ちり前よまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

つあふよまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

とあふよまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

よまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

いん秋紅葉紅葉たつるころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

後撰
秋のころよまのころ秋のころよまのころ秋のころよまのころ

也

後撰
世中乃大いんを深し草葉乃露もつるころ秋のころ

女

下葉よさらさらの風はしらけりて散る花の影

一

らりて散る花の影はしらけりて散る花の影

女

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

一

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

女

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

一

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

女

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

一

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

一

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

よみしき

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

しらけりて散る花の影はしらけりて散る花の影

拾遺

三月のころは身なるを歎け

雪たよも花と愛の身とあはれ何きたらと去

三月のころは身なるを歎け

花もろ時鳥さあめさう若し花もさうら

也

花鳥乃色をもさうさあめさう若し花もさうら

三月のころは身なるを歎け

人さうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

世の中はさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

拾遺

年よむ心氷よとれ月氣乃あさる世は

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

三月のころは身なるを歎け

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

あもん時とさうさあめさう若し花もさうら

松鶴をいひし

久し書たるもいりよも書給ふ

けり前色^{けり前}の松竹をいひしは松竹やこゝろにたり也

長乃書は目ねせしうけふもあはれ

まんじれたぬよいぬも書るんといふれくも

松の年あはれくも今いりて書れ家らうか松

いぬは松とんよん給ふも

音なく井まはるもいぬはれも蛙の色いまん

も松もまらふいしは中傳の四節書すめ

海松いりて松松も松もいりていよも給

松も松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

いよも松もいりていよも松も給

法皇西河におちりてはつらつら日鶴をいひ

とふ事をも思ふよまませ給ひける

暮 芦花の舟の河を吹風よせつてくは浪を

同 舟なり一時はとて舟はたつ舟

らやゆ。 神舟たり くらけれ ともた

あまいろ 音羽の舟 春もよ 思ひの舟

こころは 雲もたゆま 海も くらけれ

るくく けれは舟 錦の 立田れは

紅蓮の くらけれ 神も月 志すは

冬は舟 疾もたゆま 命も けれは

くくく 時よ舟は 衣も 舟も

舟もたゆま 千世に舟 世は舟 くらけれ

舟は舟 舟も思ひ 舟も 別舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

伊勢舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

舟も舟 舟も舟 舟も 舟も

暮
後撰
同

一時こころをしのばせし花の西にけしきも
春霞のゆわい糸のりも久方月をうつらも
降雪のしほもさるる人梅花にちよもま
ま生思答長紅花の山長より命をさそ
いなりは身を恨くつたりける事

同
同
同
同
同
同

命のわらわいよの徳は春のけしきも
風をたよまらへ花の散るまよひの
春のけしきもさるる人梅花にちよも
福も春のけしきもさるる人梅花にちよも
白雲とらん花のけしきもさるる人梅花にちよも
さるる人梅花にちよもさるる人梅花にちよも
朝顔とらん花のけしきもさるる人梅花にちよも

後撰

行はれは成るやせし
身夜深養欠り琴の音を
是れは下水の行のいしはれは成るやせし
いしはれは成るやせし
妹を其まゝの時いらぬ
花をよもさるる人梅花にちよも
行の折るる人梅花にちよも
妹を其まゝの時いらぬ
さるる人梅花にちよも
衣をよもさるる人梅花にちよも
女郎をよもさるる人梅花にちよも
白牡丹をよもさるる人梅花にちよも

同
同
同
同
同
同
同
同

白牡丹をよもさるる人梅花にちよも
女郎をよもさるる人梅花にちよも
衣をよもさるる人梅花にちよも
さるる人梅花にちよも
妹を其まゝの時いらぬ
花をよもさるる人梅花にちよも
行の折るる人梅花にちよも
是れは下水の行のいしはれは成るやせし
いしはれは成るやせし
妹を其まゝの時いらぬ
花をよもさるる人梅花にちよも
行の折るる人梅花にちよも
妹を其まゝの時いらぬ
さるる人梅花にちよも
衣をよもさるる人梅花にちよも
女郎をよもさるる人梅花にちよも
白牡丹をよもさるる人梅花にちよも

接

別れの情も命もよの浪れ立のりてもあつたは
ちのちも事よのりて遠く新まらぬ心
なりおちぬまらぬ海もわらぬまらぬ心
月も若きらん心いひのりて命もあつたは
風もいひのりて煙れ立ぬれはるも海は遠く
世中からあつたはる人もいひのりて命もあつたは
うらみ道もあつたはる人もいひのりて命もあつたは
疾風のせはるもいひのりて命もあつたは
あつたはるもいひのりて命もあつたは
忘れぬもいひのりて命もあつたは
ちたもいひのりて命もあつたは
つらもいひのりて命もあつたは

同 同 同 同 同 同

接

安部仲磨の唐うらむりて命もあつたは
都よりいひのりて命もあつたは
ちたもいひのりて命もあつたは
照月おのりて命もあつたは
おのりて命もあつたは
小右大臣いひのりて命もあつたは
琴の音もいひのりて命もあつたは
十二月もいひのりて命もあつたは
いひのりて命もあつたは
巻物もいひのりて命もあつたは
のりて命もあつたは
植毛もいひのりて命もあつたは

同 同 同 同 同 同

拾遺

白妙は妹の衣。梅はむ色をも香をもし。此の
春の成れとらふ。梅はむ色をも香をもし。此の
神まは。宿の知れむ。白妙はむ色をも香をもし。此の
いま。人とも。杜鵑の。む色をも香をもし。此の
妹は。む色をも香をもし。此の。紅葉せり
む色をも香をもし。此の。思ひ。む色をも香をもし。此の

いし

松は給は妹は。くく。よ。む色をも香をもし。此の
む色をも香をもし。此の。行幸。あ。む色をも香をもし。此の
奔河。の。む色をも香をもし。此の。陳時。祭。む色をも香をもし。此の

む色をも香をもし。此の

音の。む色をも香をもし。此の。佳吉。松。む色をも香をもし。此の
む色をも香をもし。此の。朝。む色をも香をもし。此の
む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の
む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の
む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の

十二月の晦日。む色をも香をもし。此の

霜の。む色をも香をもし。此の。梅。む色をも香をもし。此の。我身。む色をも香をもし。此の
我の。む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の
花。む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の
山。む色をも香をもし。此の。む色をも香をもし。此の

同 同 新 同

同 同 同 同 同 拾遺

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), located on the left page of an open book. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The ink is dark and the paper is aged and yellowed. The text appears to be a formal document or a letter, possibly related to a historical record or a personal correspondence. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive style. The text is somewhat faded and difficult to read in detail, but some characters are clearly visible, such as '給' (gift) and '申' (statement).

